○コバイモについて（原　寛・金井弘夫） Hiroshi HARA & Hiroo KANAI: On *Fritillaria japonica* Miquel

コバイモは以前には一つと考えられていたが，近年は2種に分けられている。大井博士の日本植物誌（1953）によると，コバイモ（コシノコバイモ）は花被片の縁辺及び内面特に中肋（蜜腺）上にやや著しい突起があり，伊豆・駿河・越中・越後等に産し，サワコバイモは花被片は全辺で全く突起を欠き，伊勢・四国に産する。

金井は1957年4月10日，山梨県西八代郡栄村佐野峠（850 m）附近でコバイモの一種を採集した。花は白っぽくて暗紫の斑点はなく，花被片内面の蜜腺は黄色である。又縁辺は殆ど平滑で蜜腺周辺と共に小さい乳頭状突起が時にあるが，むしろアワコバイモの一形と考えられる。アワコバイモの四国産のものは花被片の先が円頭であるが，伊勢や美濃のものではやゝ尖つてくる。しかし四国産のものでもこういう形は見られ，一方伊勢産のものでも円頭に近い花被片（特に内花被）を持つものがある。又今回の採品の様な白花品は伊勢，美濃からも知られている。

コシノコバイモの基準形では，花被片の縁辺や蜜腺の周囲に顕著な長い突起が多くあり，この点でアワコバイモと区別され，この形は岩代，越後，越中，加賀等に見られる。その他の点でも一般にコシノコバイモは葉が少し広く，花冠が大きく，花被片中央下部の屈折がアワコバイモより不明瞭であるが，いずれも互に中間形があってはっきりした区別点とは認め難い。又花被片縁辺の突起は裏日本のものでも時に不顕著なものがあるから，内面の蜜腺周囲の突起が最も有力な区別点となる。

駿河志太郡高草山の標本（大村敏朗氏 1939年3月29日 TI，4月1日 TNS, KYO）には，花被片に短い突起が散生して居り，この為に大井博士はコシノコバイモの方に入れられているが，これは今回の佐野峠の標本と共にアワノコバイモとコシノコバイモの中間形を示し，花冠の形や全体にやゝ繊細である点，どちらかといえばアワコバイモに近いといえる。

そこで筆者等はコバイモの類は矢張り以前の様に大きく一種と見て，コシノコバイモは花被片縁辺及び内面蜜腺周囲の突起の著しい形で，北陸に主に分布する地方変種であり，アワコバイモは東海から四国に分布する突起の不顕著な形と見た方が妥当と思う。ただ伊豆天城山（清水大典氏 1949年5月 TNS）及び美濃川合村原（広江美之助氏 1951年4月3日 KYO）には著しい突起があり明らかにコシノコバイモであるが，資料が少ない為今後の調査にまちたい。

なお学名の問題であるが，コバイモは飯沼欲斉の草木図説（1856）に図解されており，Miquel はこれによつて *Fritillaria japonica* を記載したと思われる。その記載（1867年）には ‘Ad iconem libri iaponici determinavi’ とあり，実物は見ていない。この事は現在 Leiden にコバイモの標本がない点からも分る。Franchet, Savatier (1876) も標本は見ていないが，飯沼欲斉の草木図説5巻82丁（1856）のコバイモの図を引用し，尾

張の産であろうと書いている。又伊藤圭介の日本産物誌近江部下 17 丁にも図があることにふれている。牧野博士は増訂草木図説 1 輯 326 頁で花の解剖図を附加されたが，これはアワコバイモの形である。

大井博士は 1937 年にアワコバイモを新種として記載した際，*Fritillaria japonica* がコシノコバイモの方であるとされたが，その理由はあげてない。

国立科学博物館所蔵の飯沼欲斉の標本中にはコバイモがあり，貼付の紙片には「美濃北山ノ産邦俗テンガイユリト称ス或ハ貝母ノ品類ノ如シイカン　コバイモ」と記してある。この記事は草木図説の「……故ニ吾北山ノ俗テンガユリノ名ヲ下ス」という記事と附合するが，図と標本の恰好は一致しない。標本は花を着けた 3 個体と根出葉 2 枚でいずれも地下部を欠き，花被片は縁辺平滑で突起はなく，先端は鈍頭，紫斑があり，標本が古くて破壊するおそれがあり解剖出来なかつたが，内面の突起は無いらしい。全体やや繊細で，結局アワコバイモの東海地方に見られる形と一致する。

以上の事を綜合して *Fritillaria japonica* Miquel は草木図説の図に基いて記載されたと解釈し，飯沼欲斉の見た資料の中で唯一の現存する標本であると思われる前記科学博物館所蔵の美濃北山（現在の岐阜県山県郡北山村に当ると考える）産の標本をこの種の Lectotype に選ぶのが適当であると考える。従つて *Fritillaria japonica* Miq. はアワコバイモの学名となり，又コバイモの和名もアワコバイモと同じ植物を指す事になる。

以上を整理すると次の通りである。

Fritillaria japonica Miquel. Ann. Mus. Lugd.-Bat. **3**: 158 (1867).

var. **japonica.**

F. Muraiana Ohwi in Act. Phytotax. Geobot. **6**: 150 (1937).

Nom. Jap. Ko-baimo, Tengaiyuri (Iinuma), Awa-kobaimo (Ohwi 1937).

Lectotype—Honsyu. Prov. Mino: Kitayama (Y. Iinuma; TNS).

Distr. Honsyu (Kai, Suruga, Mikawa?, Mino, Ise and Oomi?) and Sikoku (Awa and Tosa).

f. **alba** Hara et Kanai, f. nov.

Perigonia albida non maculata, intus secus glandulum lutea.

Nom. Jap. Siro-kobaimo (nom. nov.).

Type—Honsyu Prov. Kai: Nisiyatusiro-gun, Sakae-mura, Sano pass (H. Kanai, April 10, 1957: TI).

Distr. Honsyu (Kai, Mino and Ise).

var. **Koidzumiana** (Ohwi) Hara et Kanai, stat. nov.

F. Koidzumiana Ohwi in Journ. Jap. Bot. **13**: 441 (1937).

Nom. Jap. Kosino-kobaimo (Ohwi 1937).

Distr. Honsyu (Iwasiro, Etigo, Etizen, Kaga, Mino and Izu?).